

敷島町文化財調査報告 第23集
(山 梨 県)

山 宮 地 遺 跡 I

大型店舗建設工事に伴う
平安時代・中世遺跡の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会

敷島町文化財調査報告 第23集
(山 梨 県)

山 宮 地 遺 跡 I

大型店舗建設工事に伴う
平安時代・中世遺跡の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会

序 文

敷島町の南部は荒川により形成された扇状地形となっており、ここには古くから私たちの先祖でもあった人々が生活していた数多くの貴重な遺跡が残されています。

近年、この町の南部では店舗建設や宅地造成などによる開発が急増しており、埋蔵文化財保護のための緊急調査が頻繁に行われています。

今回、報告する山宮地遺跡の第Ⅰ次調査も、店舗建設に伴い実施した発掘調査となりました。その結果、平安時代の住居跡 3 軒や中世(15～16 世紀代)の竪穴状遺構 1 基、土坑や溝状遺構などが発見され、今後のわが町、周辺地域の歴史解明において貴重な成果を上げることができました。

これまで、本町で行ってきた調査の成果については、後世に伝えていくとともに、調査研究、教育普及、生涯学習の資として多くの皆様に幅広く活用していただけるよう今後も努めてまいります。

最後に、地権者中込岩一氏の文化財保護に対する深いご理解の下、調査が実施できましたことに深く感謝するとともに、ご指導、ご協力を頂きました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成 16 年 6 月





敷島町教育委員会

教育長 山 口 正 智

例 言

1. 本報告書は、山梨県中巨摩郡敷島町島上条地区に所在する山宮地遺跡の発掘報告書である。
2. 本調査は、大型店舗の建設に伴って実施した発掘調査で、調査面積は約 150 m²である。
発掘調査から報告書刊行までの経費は、地権者中込岩一氏が負担した。
3. 発掘調査は、平成 11 年(1999 年) 9 月 17 日～同年 10 月 1 日まで行い、整理作業は、断続的に行った。
4. 発掘調査および整理作業にあたった組織は、次のとおりである。
調査指導・主管 敷島町教育委員会
調査主体者 敷島町文化財調査会
調査指導担当者 <発掘調査・整理調査> 大寫正之(敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係副主査)
<整理調査> 小坂隆司(敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係嘱託)
調査事務局 敷島町文化財調査会
5. 本書の執筆、編集は小坂が担当し、全体校正を大寫が行った。遺構は大寫が撮影し、遺物撮影は小坂が行った。
6. 調査と報告書作成にあたり、次の方々より御教示をいただいた。ここにご芳名を記し、感謝申し上げる。
小野正敏(国立歴史博物館)、藤沢良祐(瀬戸市埋蔵文化財センター)、羽中田壯雄、畑 大介(敷島町文化財審議会)、保坂康夫(山梨県埋蔵文化財センター)、山下孝司、関間俊明(韮崎市教育委員会)、佐々木満(甲府市教育委員会) (順不同、敬称略)
7. 発掘調査ならびに整理作業参加者(敬称略)
青山制子、飯室久美恵、石川弘美、長田由美子、小林明美、関本芳子、高添美智子、堤 吉彦、望月典子
8. 本遺跡の出土遺物および調査で得たすべての記録は一括して敷島町教育委員会に保管してある。

凡 例

1. 遺物挿図中、断面が白抜きは土師器・土師質土器で、は須恵器、は陶器類、は磁器である。は焼土の範囲を示す。

本 文 目 次

序文	2.	1号竪穴状遺構	6	
例言・凡例		3.	土坑	7
第1章 遺跡をとりまく環境	1	4.	溝状遺構	9
第2章 遺構と遺物	4	第3章 遺構外出土遺物	10	
1. 住居跡	4	第4章 まとめ	11	

挿 図 目 次

第1図 山宮地遺跡と周辺の遺跡	2	第6図 1号竪穴状遺構と出土遺物	6
第2図 山宮地遺跡第1次調査区位置図	3	第7図 1～8号土坑	7
第3図 山宮地遺跡第1次調査区遺構配置図	3	第8図 土坑出土遺物	8
第4図 2号住居跡と出土遺物	4	第9図 溝状遺構と出土遺物	9
第5図 3号住居跡と出土遺物	5	第10図 遺構外出土遺物	10

挿 表 目 次

第1表 2号住居跡出土遺物観察表	4	第5表 土坑出土遺物観察表	8
第2表 3号住居跡出土遺物観察表	5	第6表 溝状遺構一覧	9
第3表 1号竪穴状遺構出土遺物観察表	6	第7表 溝状遺構出土遺物観察表	9
第4表 土坑一覧	7	第8表 遺構外出土遺物観察表	11

写 真 図 版

図版 1 調査区全景と各遺構

図版 2 各遺構出土遺物

第1章 遺跡をとりまく環境

1. 遺跡の立地と環境（第1図）

敷島町が所在する甲府盆地の北西部は、奥秩父の金峰山を源とし南流する荒川によって開析された北から南へと緩やかに傾斜した扇状地形を成している。この一帯の西側には、北西部にそびえる茅ヶ岳の裾部を形成するなだらかな赤坂台地が貢川と釜無川に挟まれるように南北に張り出して伸びており、JR中央線付近において終息する。一方、北側はこの扇状地形の背後を担うように東西に大きく片山が跨り、さらに東側には千代田湖を挟んで尾根筋を南側へと進むと舌状に張り出した湯村山がある。

このように甲府盆地の北西部は、東西北部の三方が台地と山々によって「コ」字状に取り囲まれ、しかも南側の盆地に向かって開口し、まるで天然の要害を形成するかのような特殊な地形を織り成している。

このうち、荒川の右岸に位置する敷島町は、町域は南北約17 km、東西約4 kmと南北に細長い町である。本町は大きく北部の山岳山間地帯と南部の扇状地形におおよそ大別されるが、町域のほぼ8～9割は標高1,704 mを測る茅ヶ岳をはじめとする曲岳、太刀岡山などの山岳地帯や一部の丘陵からなっている。

一方、町南部は上述した荒川による扇状地形で、東はちょうど荒川右岸に面し、西は貢川を境として東西を河川で挟まれた南北に細長い格好を呈し、盆地北西部の一部に相当する。

以上のように、甲府盆地北西部は中央に荒川が南流し、東西北部の三方を台地と丘陵により囲まれた空間が形成され、荒川右岸の本町ではこのような地形をもとに様々な歴史的背景が垣間みられる。

2. 山宮地遺跡とその周辺（第1・2図）

上述したように、敷島町南部は荒川の扇状地上に立地している。そして、この扇状地上には、さらに南北に向かって東西に大きくは2本の微高地が形成されている。このうち、東側にある微高地には北から本遺跡の山宮地遺跡①、村統遺跡③、不動ノ木遺跡④、松ノ尾遺跡⑤、末法遺跡⑨などが占地しており、もう一方の西側の微高地には御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧などがある（第1図）。

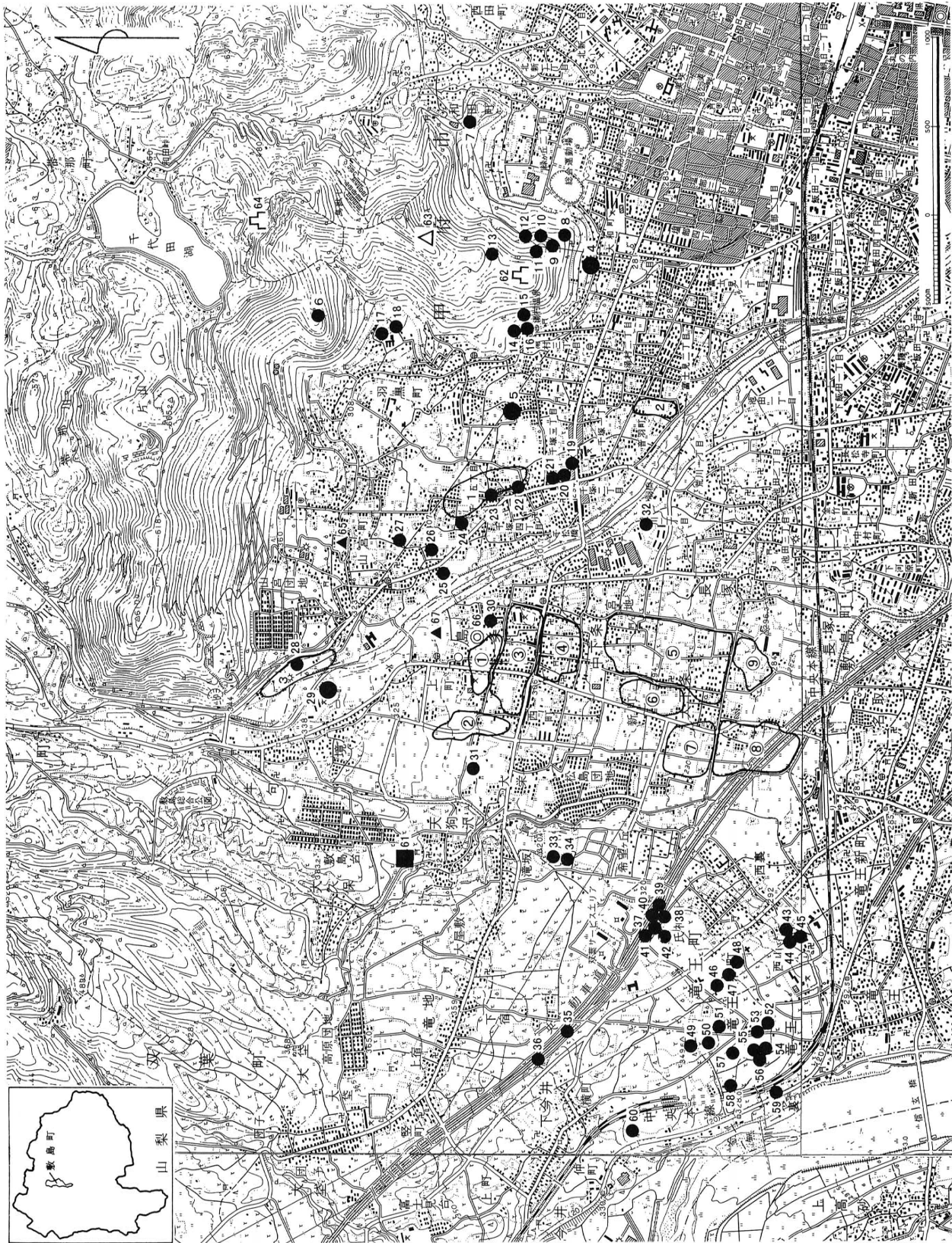
山宮地遺跡①は、東側微高地上の標高約311～314 mを測り、遺跡の東側に南流する荒川からは約300 mの位置にある。そして、今回の第I次調査は遺跡の中央北側にあたり、町の中央を南北に走る県道敷島・竜王線に面した西側で店舗建設事業に伴い約150 m²が調査された。

本遺跡の周辺にある遺跡についてみておきたい。谷状の地形を挟んで西側には原腰遺跡②があり、1989に一部調査がおこなわれている。このときの調査では、縄文時代前期の住居跡1軒、古墳時代前期の住居跡6軒、平安時代末葉の住居跡14軒のほか、土坑、溝状遺構などが発見されている。中でも、平安時代末葉では、11世紀後半から12世紀代にかけての資料がまとまって出土している。

本遺跡の南には村統遺跡③が隣接している。2001年に第I次調査が行われ、奈良・平安時代の集落跡が確認され、住居跡軒数はわずか320 m²の調査であったが36軒という驚異的な軒数で複雑に重複し合って発見された。時期的にはおよそ8世紀後半～12世紀代にかけて、ほぼ連綿と長期にわたり継続した集落跡であったことが明らかとなった。遺物には、土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、墨書土器などをはじめ、瓦片、長頸壺（壺G）、転用硯、白磁、銅製小仏像の台座などがあり、僅少ではあるが中世後半期（15～16世紀代）のカワラケや播鉢、内耳土器、白磁皿、青磁碗なども出土している。

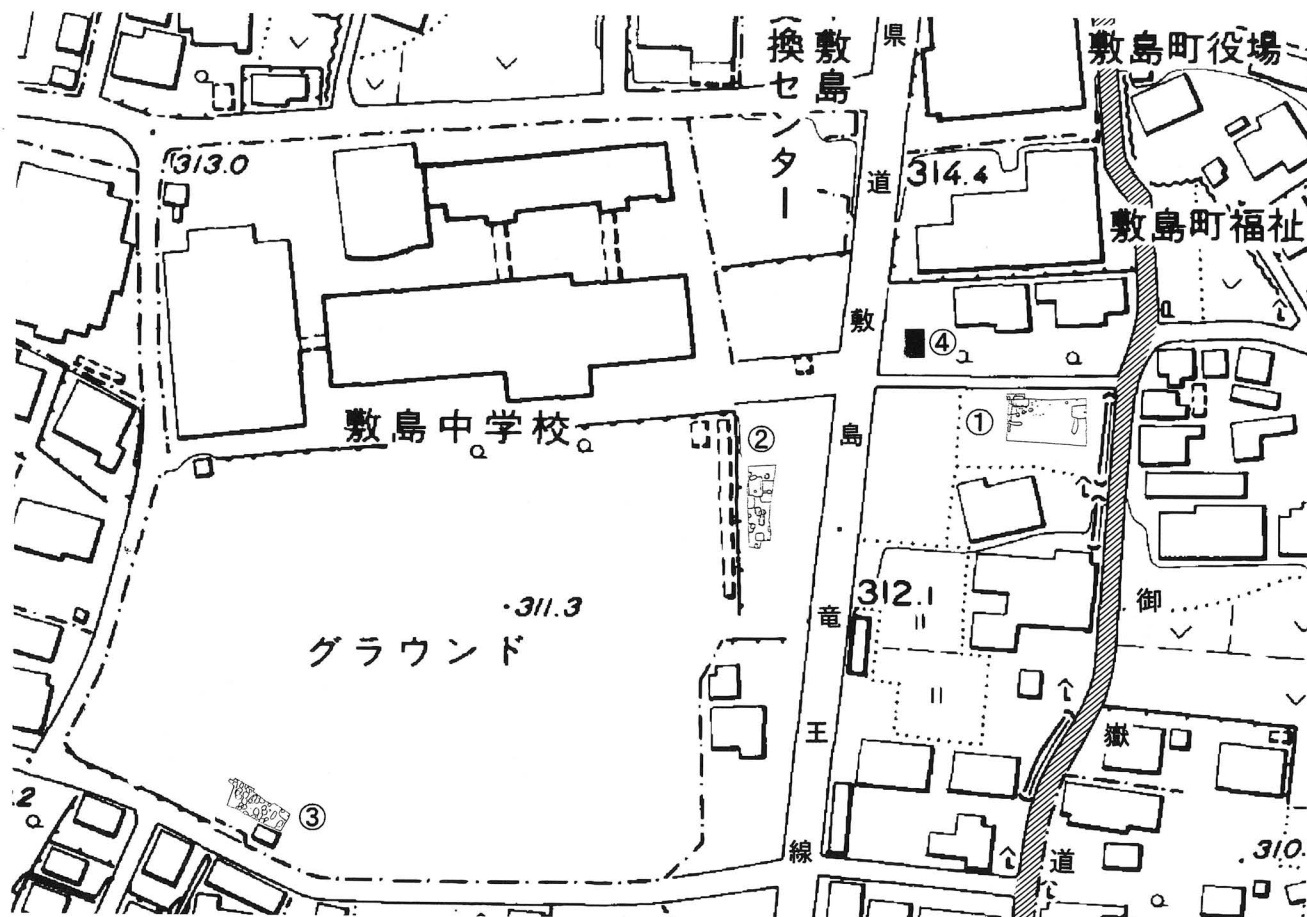
また、本遺跡の中央には南北朝に発達した「御嶽道」が縦断しており、さらに遺跡の東側には調査の手がまだ入ったことのない大庭遺跡がある。「甲斐国志」古蹟部には字大庭に武田家の家臣であった「土屋惣蔵昌恒」屋敷跡(66)が存在したという記述がみられ、本遺跡との関連からも興味深い遺跡である。

このように、山宮地遺跡の周辺では近年の調査の積み重ねにより、これまで窺い知ることのできなかつた本地域周辺の歴史を紐解くための、数多くの貴重な文化遺産が眠っていることが明らかとなってきている。

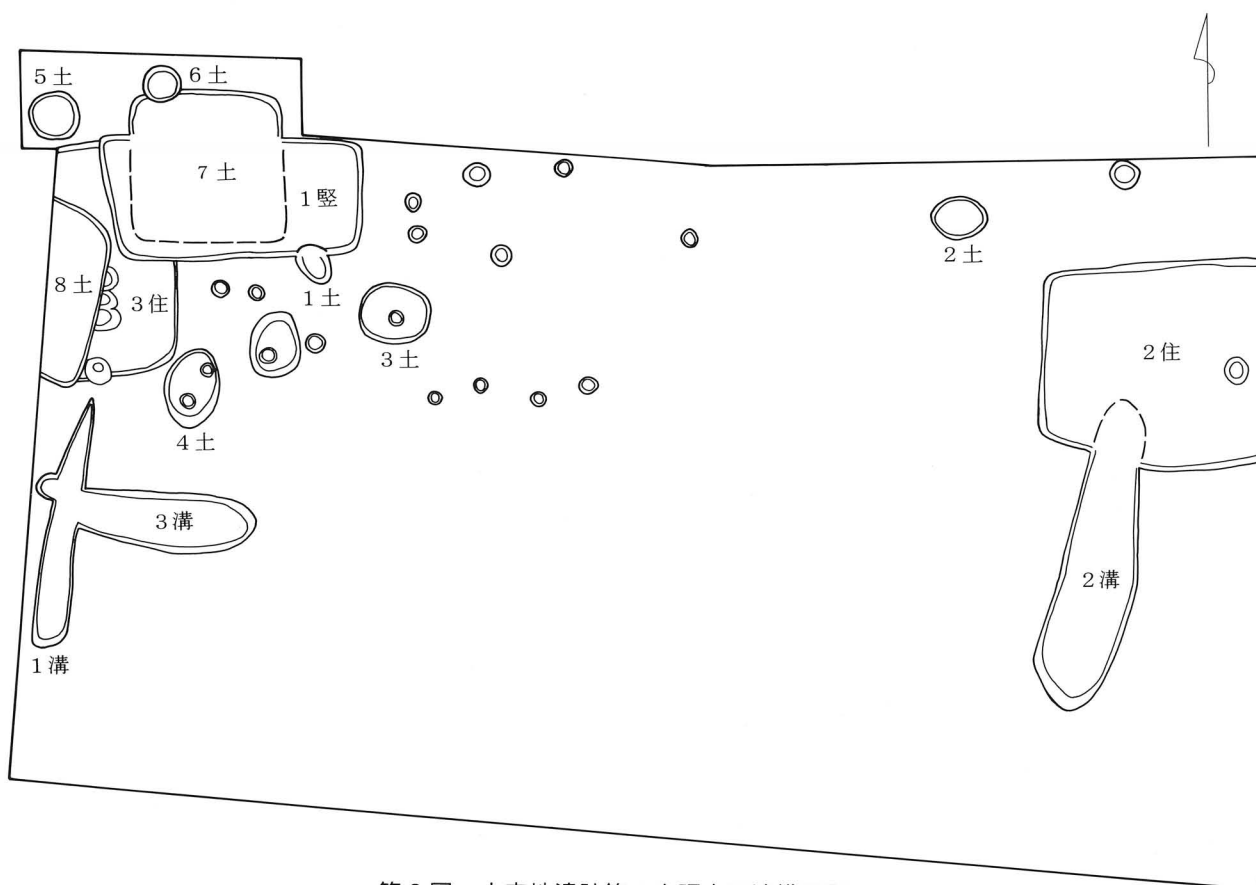


- ① 山宮地
- ② 原塚
- ③ 村塚
- ④ 不動ノ木
- ⑤ 松ノ塚
- ⑥ 三枝田
- ⑦ 金ノ尾
- ⑧ 末法
- 1 榎田
- 2 菅羽
- 3 米屋
- 4 万寿軒古墳
- 5 加年部塚古墳
- 6 おてんくさん古墳
- 7 二光寺山古墳
- 8 湯村山1号古墳
- 9 湯村山2号古墳
- 10 湯村山3号古墳
- 11 湯村山4号古墳
- 12 湯村山5号古墳
- 13 湯村山6号古墳
- 14 大平1号古墳
- 15 大平2号古墳
- 16 城沢寺無名古墳
- 17 大塚古墳
- 18 無名塚古墳
- 19 兼師塚古墳
- 20 証文塚古墳
- 21 風塚古墳
- 22 猪塚古墳
- 23 無名2号墳
- 24 子辺塚古墳
- 25 無名1号墳
- 26 天神塚古墳
- 27 天塚古墳
- 28 米道古墳
- 29 大塚古墳
- 30 大塚古墳
- 31 狐塚古墳(敷島町)
- 32 穴塚古墳
- 33 双塚古墳
- 34 住生塚古墳
- 35 双塚2号古墳
- 36 狐塚古墳(双葉町)
- 37 兼王1号墳
- 38 兼王2号墳
- 39 兼王3号墳
- 40 ニツ塚1号墳
- 41 ニツ塚2号墳
- 42 へひ塚
- 43 西山1号墳
- 44 西山2号墳
- 45 西山3号墳
- 46 狐塚1号墳
- 47 狐塚2号墳
- 48 狐塚3号墳
- 49 中株塚
- 50 丸山古墳
- 51 四ツ石塚
- 52 形部塚1号墳
- 53 形部塚2号墳
- 54 阿目塚1号墳
- 55 阿目塚2号墳
- 56 阿目塚3号墳
- 57 阿目塚4号墳
- 58 阿目塚5号墳
- 59 片瀬塚
- 60 双葉3号墳
- 61 天狗沢五塚
- 62 湯村山塚
- 63 法皇寺山塚
- 64 和山城山塚(五輪塚1基)
- 65 山之神塚(五輪塚1基)
- 66 土屋新屋山塚(五輪塚1基)
- 67 慈徳院五輪塚

第1図 山宮地遺跡と周辺の遺跡



第2図 山宮地遺跡第1次調査区位置図 (①第1次、②第2次、③第3次、④H13年度試掘)



第3図 山宮地遺跡第1次調査区遺構配置図

第2章 遺構と遺物

山宮地遺跡では、平成11年度(1999年)に初めて調査がおこなわれ、平成13年度(2001・2002年)には2度の調査(第II・III次調査)を実施してきた(第2図参照)。

1. 住居跡

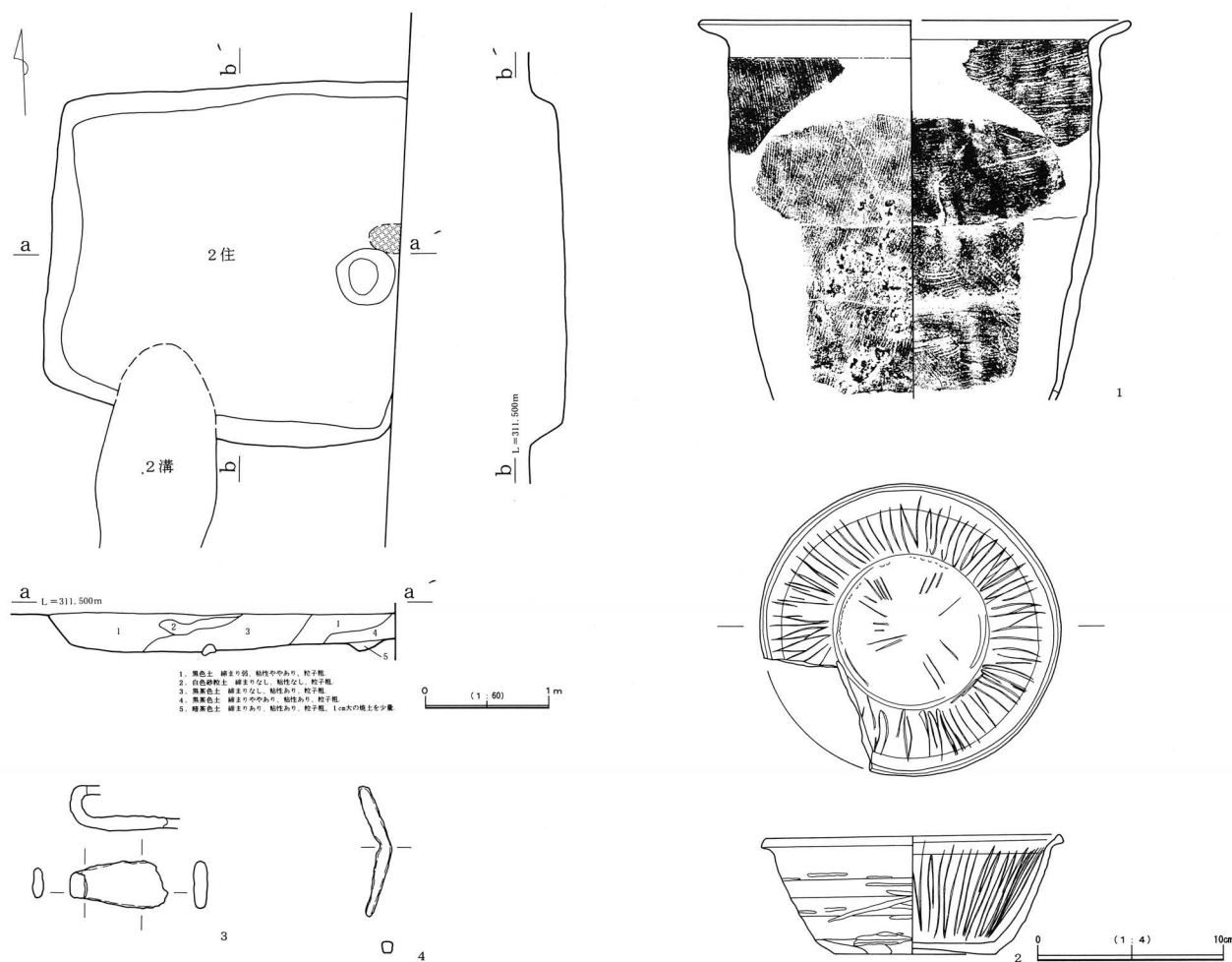
a. 2号住居跡(第4図、第1表、図版1-2、2-1)

本住居跡は、調査区東部の北側において発見され、2号溝状遺構と重複し切られている。

規模は、南北約2.9mを測り、東側は調査区外となるが南東隅部で本住居跡のコーナー部分が確認されていることから、おそらく東西約2.9mを測るものと考えられ、方形を呈する住居跡である。壁は緩やかに立ち上がり、深さ約20~30cmを測る。

住居跡内にはとくに施設は見当たらなかったが、北東部周辺に大型の石が集中して出土し(図版1-2)、また、住居跡東側中央の調査区際から焼土のまとまりと、浅く窪んだ落込みがみられた。

遺物は、上記の東側でみつかった焼土中から壊れた甕1が出土し、また鉢2は南東部コーナー隅部の床面上から逆位の状態でみつかった。



第4図 2号住居跡と出土遺物

No.	器種	器形	大きさ(cm)			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	図版
			器高	口径	底径					
2住-1	土師器	甕		(12.8)		粗・長石、石英、金・黒色雲母	赤褐色	良	ハケ調整。	2-1
2住-2	土師器	鉢	6.5	15.8	8.6	密、石英、金色雲母、赤色粒子	橙褐色	良	底部回転糸痕。内面放射状暗文。	2-1
No.	種別		大きさ(cm)			特徴				図版
			最大長	最大幅	最大厚					
2住-3	鉄製品	不明	5.2	2.6	0.8					2-1
2住-4	鉄製品	釘?	7.0	0.8	0.6					2-1

第1表 2号住居跡出土遺物観察表

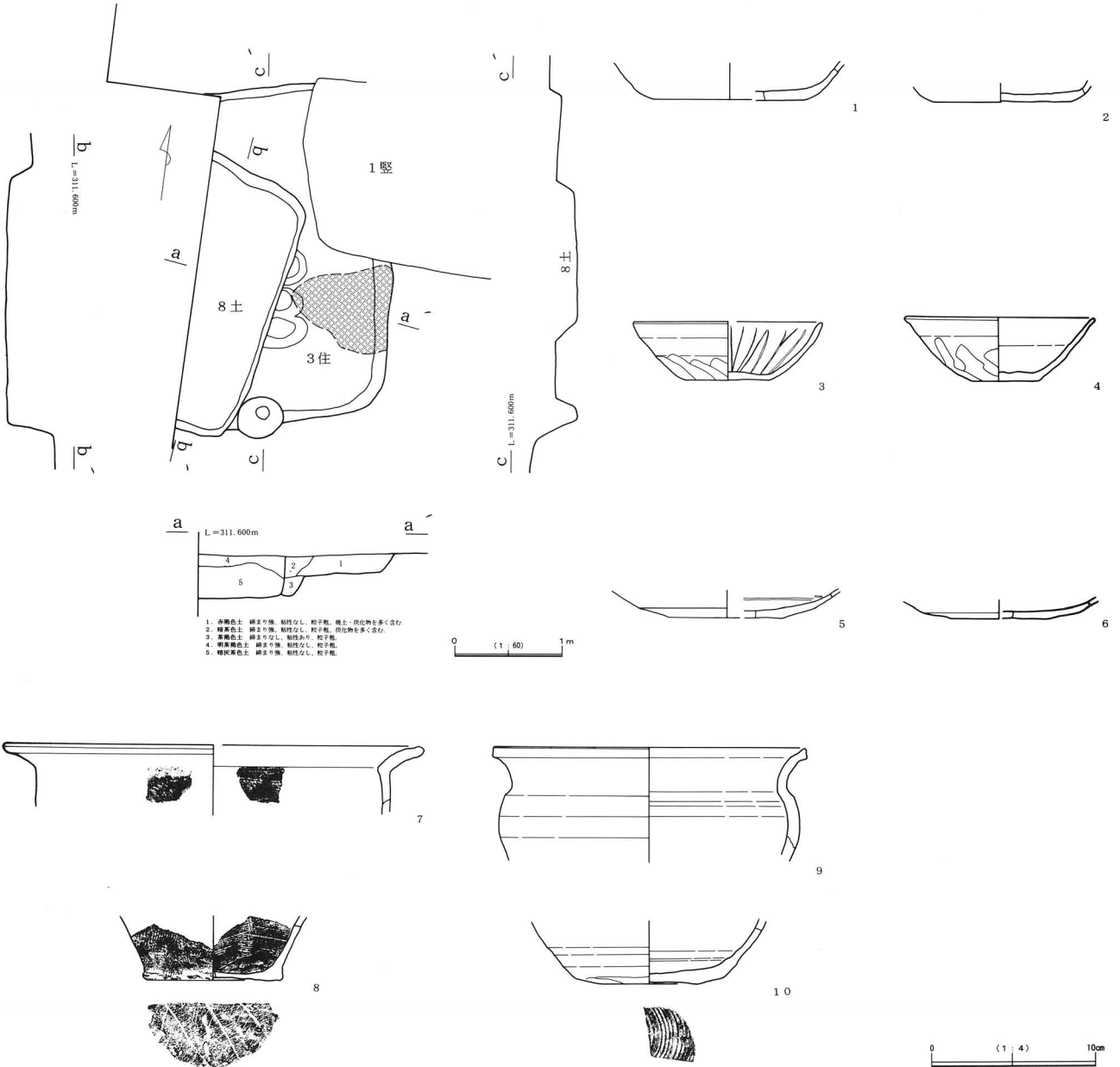
b. 3号住居跡 (第5図、第2表、図版1-3、2-2)

調査区の北西部に位置し、3号住居跡は、8号土坑と1号竪穴状遺構、ピットなどに切られている。

規模は南北約3.1m、確認可能な範囲で東西約1.8mを測り、形態は方形を呈していたと考えられる。壁は緩やかに立ち上がり、深さ約17cmを測る。

住居南東部では焼土が検出され、周辺の遺構との切り合いでカマドが破壊されてしまった可能性もある。

遺物は、坏1~4 (3は内面放射状暗文)、皿5 (内面渦巻状暗文)・6、甕7~10などが出土している。



第5図 3号住居跡と出土遺物

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	図版
			器高	口径	底径					
3住-1	土師器	坏			(9.2)	密、長石、石英、黒色雲母、赤色粒子	橙褐色	良		2-2
3住-2	土師器	坏			(8.0)	密、長石、石英、黒色雲母、赤色粒子	橙褐色	良		
3住-3	土師器	坏	3.6	11.4	5.0	密、石英、金色雲母、赤色粒子	橙褐色	良	内面放射状暗文。	2-2
3住-4	土師器	坏	4.0	11.4	4.2	密、石英、金色雲母、赤色粒子	橙褐色	良		2-2
3住-5	土師器	皿			(7.0)	密、石英、赤色粒子	橙褐色	やや良	内面渦巻状暗文。	2-2
3住-6	土師器	皿			(6.0)	密、石英、赤色粒子	暗橙褐色	やや良		2-2
3住-7	土師器	甕		(25.2)		粗、石英、金色雲母、赤色粒子	赤褐色	良	内面横位ハケ調整、外面縦位ハケ調整。	2-2
3住-8	土師器	甕			(8.0)	粗、石英、金色雲母、赤色粒子	黒褐色	良	内・外面ハケ調整、底部木葉痕。	2-2
3住-9	土師器	ロクロ甕			(18.8)	やや粗、長石、石英	暗灰褐色	良	ロクロ整形。	2-2
3住-10	土師器	ロクロ甕			(5.8)	やや粗、長石、石英、赤色粒子	暗灰褐色	良	底部回転糸切り後、外面底部周縁ヘラ削り。	2-2

第2表 3号住居跡出土遺物観察表

2. 1号竪穴状遺構（第6図、第3表、図版1-4、2-3）

調査区の北西部に位置し、1・7号土坑によって切られ、3号住居跡を切っている。また、本竪穴状遺構の床面中央北側からはピットの痕跡とみられる落込み（長軸約35cm、深さ約13cm）が認められたが、周辺から数多く検出されたピット群の1つではないかと推測され、本遺構に付随するものではないと判断した。

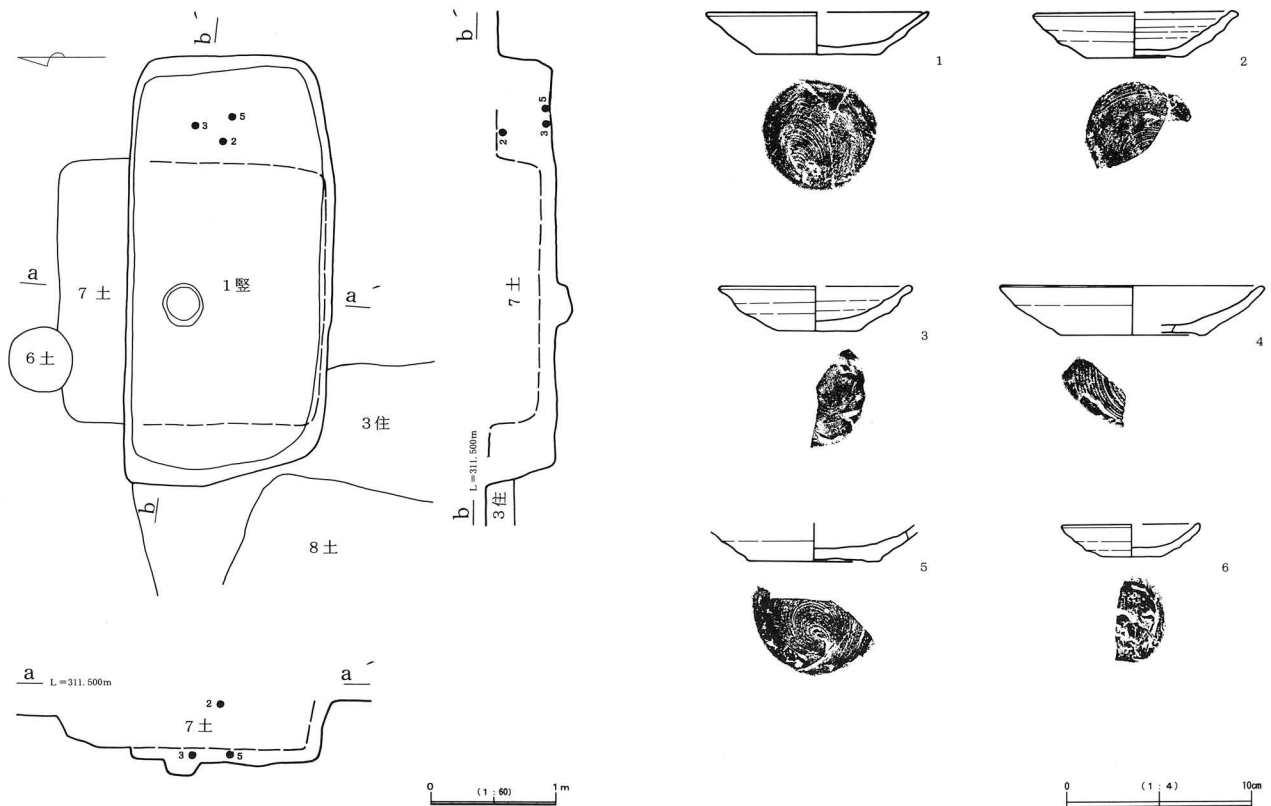
竪穴状遺構の規模は、東西約3.4m、南北約1.7mあり、形態は長方形を呈する。壁は、底部よりやや斜めに直線的に立ち上がって、深さ約45~55cmを測り、しっかりとした掘り込みとなっている。

遺物には土師質皿（カワラケ）1~6があるが、いずれも精製されたような密な胎土を有している。

土師質皿（カワラケ）2・3・5は、本竪穴状遺構の東側から出土している(7号土坑とは平面的にも重ならない東側部分)。この内、土師質皿（カワラケ）2は竪穴状遺構の東側中央の上層から出土した。そして、他の土師質皿（カワラケ）3・5は、竪穴状遺構の東側、床面中央付近からまとまって出土した。

本遺構は、当初北側調査区際にて発見され、この後本遺構の北側周辺を中心に調査区の拡張を行った。

その結果、本竪穴状遺構の北側に重複し方形を呈する7号土坑の北側プランが確認され、本遺構と7号土坑が重複関係にあることが明らかとなった。この時点では、すでに1号竪穴状遺構は大方の覆土を掘り上げてしまっていたため詳細な重複関係は明らかでない。しかし、本竪穴状遺構出土の土師質皿と7号土坑北側から出土したものをみると、後者の7号土坑からは器厚が比較的厚く胎土が粗雑で、竪穴状遺構に比べ比較的新しい特徴をもつ土師質皿が伴出していることから、7号土坑が本竪穴状遺構を切っていると考えられる。



第6図 1号竪穴状遺構と出土遺物

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	図版
			器高	口径	底径					
1	土師質土器	カワラケ	2.3	(11.6)	(6.4)	やや密、石英、金色雲母、赤・黒色粒子	明橙褐色土	良	底部回転糸切り痕。	2-3
2	土師質土器	カワラケ	2.4	(10.5)	(5.4)	やや密、石英、金色雲母、赤色粒子	橙褐色土	良	底部回転糸切り痕。	2-3
3	土師質土器	カワラケ	2.4	(9.8)	(4.4)	やや密、石英、金色雲母、赤色粒子	橙褐色土	良	底部回転糸切り痕。	2-3
4	土師質土器	カワラケ	2.6	(13.6)	(7.8)	やや密、石英、金色雲母、赤色粒子	灰橙褐色土	良	底部回転糸切り痕。	2-3
5	土師質土器	カワラケ			(6.8)	やや密、石英、金色雲母、赤色粒子	橙褐色土	良	底部回転糸切り痕。	2-3
6	土師質土器	カワラケ	1.7	(7.1)	(3.0)	やや密、石英、金色雲母、赤色粒子	橙褐色土	良	底部回転糸切り痕。	2-3

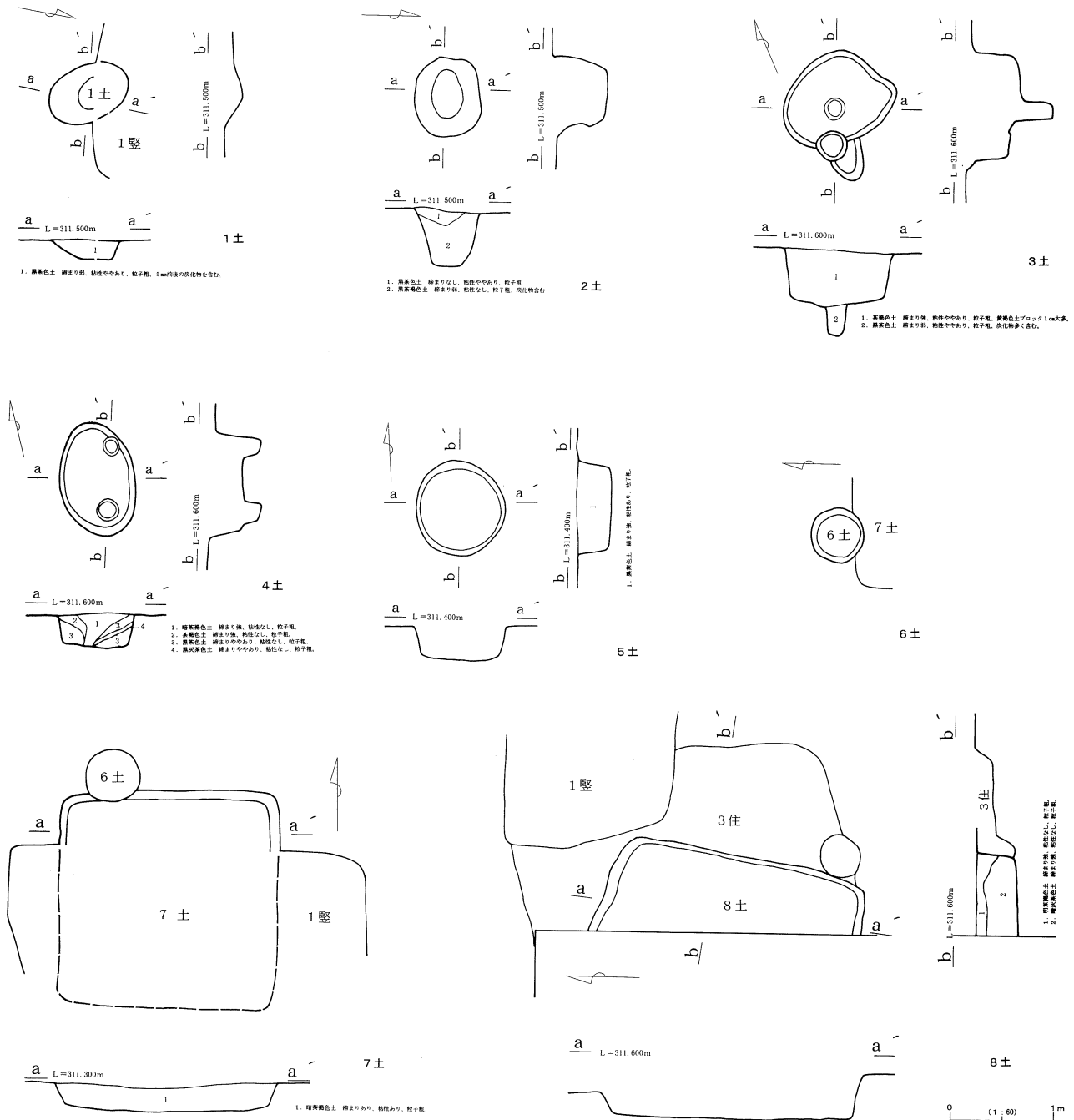
第3表 1号竪穴状遺構出土遺物観察表

3. 土坑 (第7・8図、第4・5表、図版1-5~7、2-4・5)

今回、計8基の土坑が発見された。

形態的には、1~4号土坑の楕円形のもの、5・6号土坑の円形のもの、7・8号土坑の方形を呈するものがみられる。そして、楕円形のものの中には3・4号土坑のように坑底にピットを有するものなどがある。

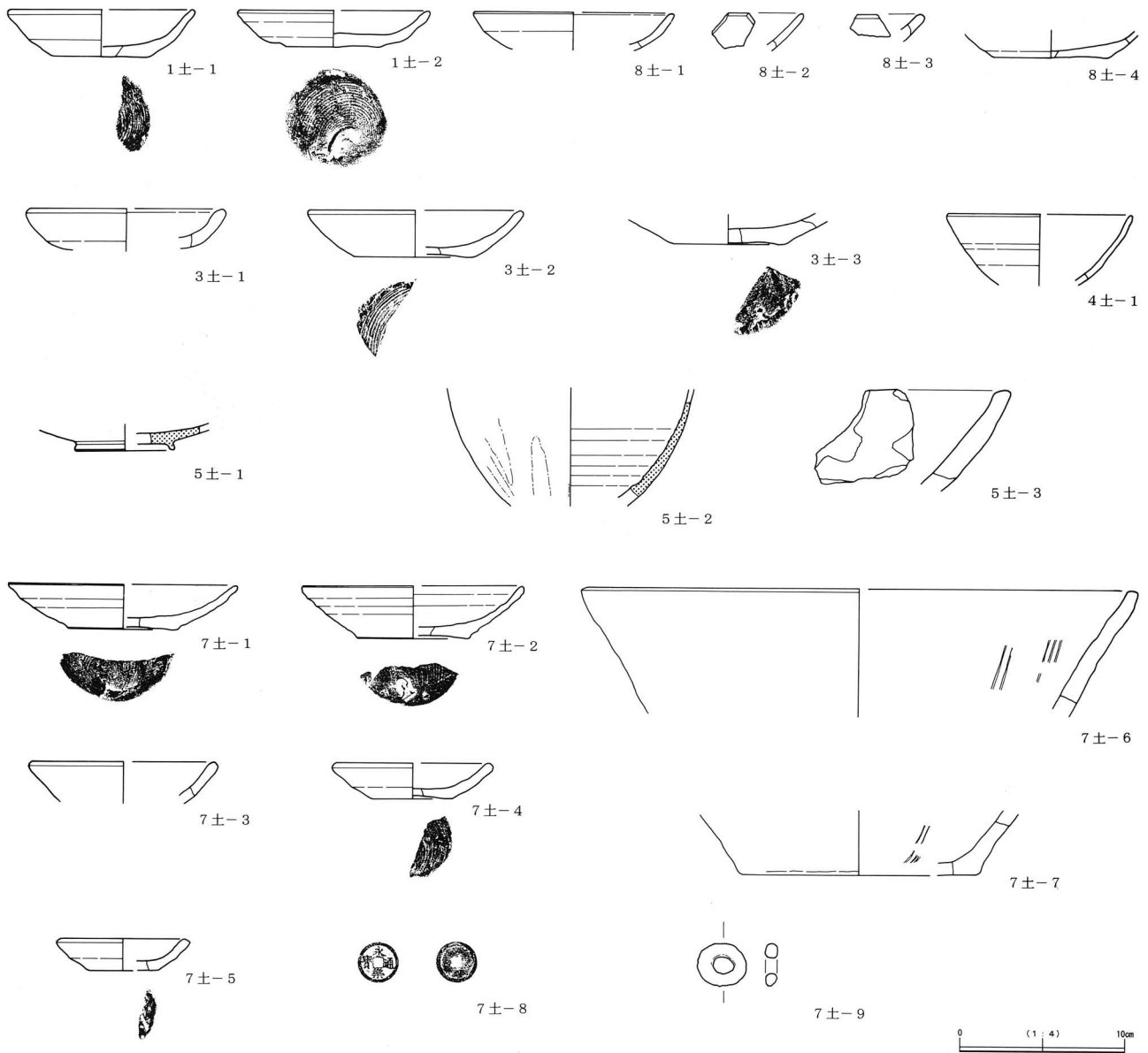
遺物は、1・3~5・7・8号土坑から出土しており、このうち1・3・7・8号土坑は出土遺物からみて中世に属する遺構と考えられる。



第7図 1~8号土坑

No.	調査区位置	形態	規模 (m)			備考	図版	No.	調査区位置	形態	規模 (m)			備考	図版
			長軸	短軸	深さ						長軸	短軸	深さ		
1号	北西部	楕円形	(0.45)	0.53	0.18	1 壙と重複。		5号	北西部隅	円形	0.93	0.85	0.33		
2号	北東部	楕円形	0.75	0.63	0.55		1-5	6号	北西部隅	円形	0.53	0.5		7 土と重複。	
3号	北西部	楕円形	1.1	0.85	0.55	坑底ピット。	1-6	7号	北西部	方形	2.1	(2.1)	0.26	1 壙と6 土と重複。	1-7
4号	西側	楕円形	1.1	0.72	0.35	坑底ピット。		8号	西側	方形	2.4	(1.0)	0.4	3 住と重複。	

第4表 土坑一覧



第8図 土坑出土遺物

No.	器種	器形	大 き さ (cm)			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	図版
			器高	口径	底径					
1±-1	土師質土器	カワラケ	2.9	(11.0)	(5.6)	粗、石英、長石、金色雲母、赤色粒子	明橙褐色	やや良	底部回転糸切り痕。	2-4
1±-2	土師質土器	カワラケ	2.2	(11.4)	(5.7)	粗、石英、長石、金色雲母、赤色粒子	暗橙褐色	やや良	底部回転糸切り痕。	2-4
3±-1	土師質土器	カワラケ		(11.6)		粗、石英、長石、金色雲母、赤色粒子	暗橙褐色	やや良		2-4
3±-2	土師質土器	カワラケ	2.8	(11.6)	(5.0)	やや密、石英、金色雲母、赤色粒子	明橙褐色	良	底部回転糸切り痕。	2-4
3±-3	土師質土器	カワラケ			(6.6)	やや密、石英、金色雲母、赤色粒子	明橙褐色	良	底部回転糸切り痕。	2-4
4±-1	土師器	坏		(11.0)		密、石英、金色雲母、赤色粒子	暗橙褐色	良		2-4
5±-1	灰釉陶器	皿			(5.6)	やや密	灰白色	良		2-4
5±-2	灰釉陶器	壺				粗、黒色粒子	灰色	良		2-4
5±-3	土師質土器	搦鉢				やや粗、石英、金色雲母、赤色粒子	橙褐色	やや良		2-4
7±-1	土師質土器	カワラケ	2.7	(13.6)	(6.6)	粗、長石、石英、赤色粒子	明橙褐色	やや良	底部回転糸痕。	2-5
7±-2	土師質土器	カワラケ	3.2	(13.2)	6.8	やや密、石英、金色雲母、赤色粒子	橙褐色	良	底部回転糸痕。	2-5
7±-3	土師質土器	カワラケ		(9.0)		粗、石英、金色雲母、赤色粒子	黒灰褐色	やや良		2-5
7±-4	土師質土器	カワラケ	2.2	(9.2)	(4.6)	粗、石英、金色雲母、赤色粒子	橙褐色	やや良	底部回転糸痕。	2-5
7±-5	土師質土器	カワラケ	1.9	(7.4)	(4.0)	粗、石英、金色雲母、赤色粒子	橙褐色	やや良	底部回転糸痕。	2-5
7±-6	土師器	搦鉢		(32.2)		やや粗、石英、金色雲母、赤色粒子	黒灰褐色	やや良		2-5
7±-7	土師器	搦鉢			(14.0)	やや粗、石英、金色雲母、赤色粒子	明橙褐色	やや良		2-5
8±-1	土師質土器	カワラケ		(11.8)		やや粗、石英、白・赤色粒子	橙褐色	やや良		
8±-2	土師質土器	カワラケ				やや密、石英、金色雲母、黒色粒子	白橙褐色	やや良		
8±-3	土師質土器	カワラケ				やや粗、石英、金色雲母、赤色粒子	白橙褐色	やや良		
8±-4	土師質土器	カワラケ			(7.0)	やや密、石英、金色雲母、赤色粒子	白橙褐色	やや良		

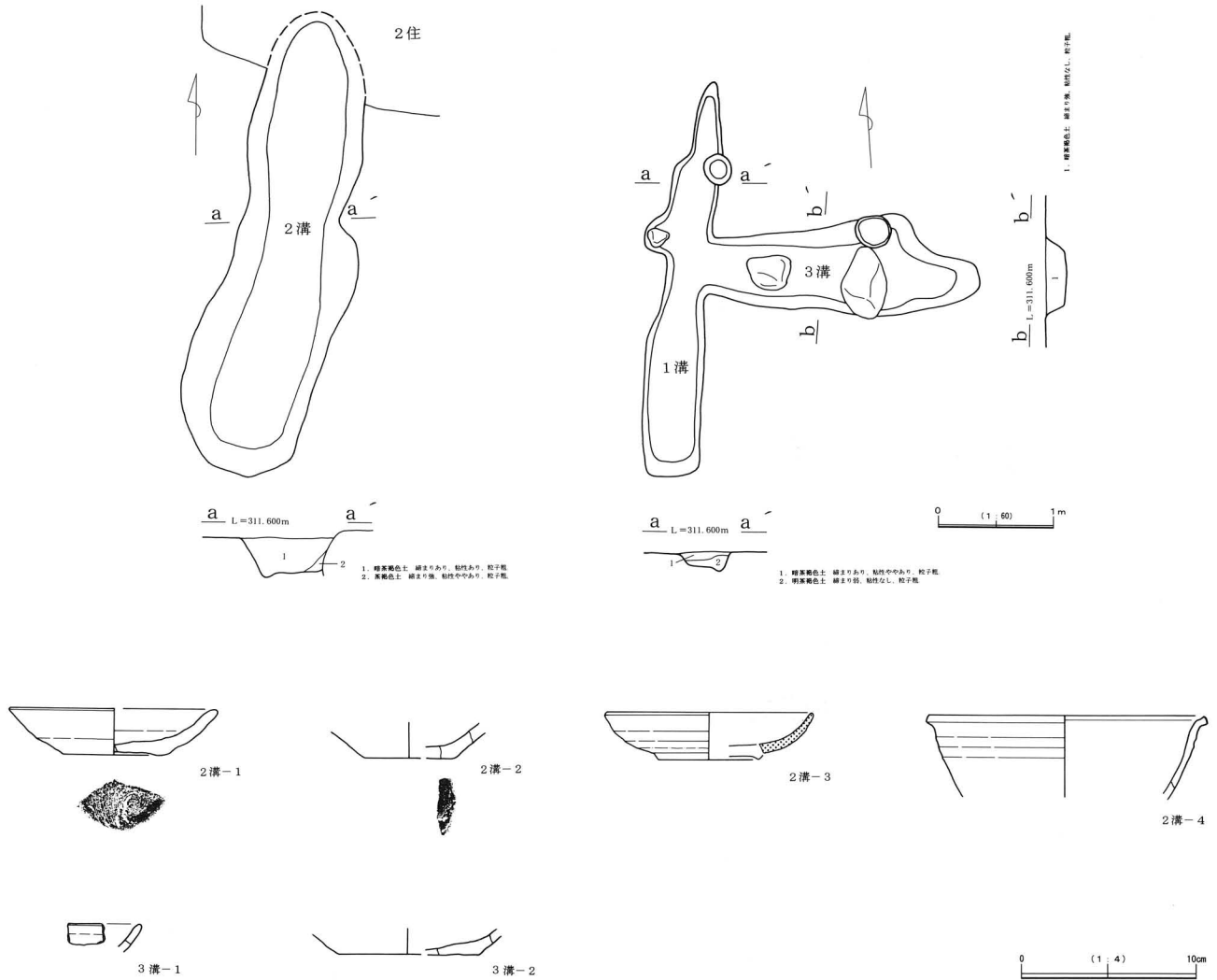
No.	種別	永楽通宝	大 き さ (cm)			特 徴	図版
			最大長	最大幅	最大厚		
7±-8	銅銭	永楽通宝	2.45	2.45	0.05		2-5
7±-9	鉄製品	不明	2.9	2.5	0.7		2-5

第5表 土坑出土遺物観察表

4. 溝状遺構 (第9図、第6・7表、図版1-8・9、2-6)

溝状遺構は3条が確認された。このうち、1・3号溝状遺構は重複し、それらの切り合い関係については不明である。3号溝状遺構内から土師質皿(カワラケ)の破片2点(3溝-1・2)が出土していることから、3号溝状遺構については中世に所属するものと考えられる。

また、2号溝状遺構は、平安時代の2号住居跡と重複して発見されたが、出土した遺物には土師質皿(カワラケ)の破片2点(2溝-1・2)と瀬戸美濃産の灰釉陶器丸皿(2溝-3)がみられ、中世に属する。



第9図 溝状遺構と出土遺物

No.	調査区位置	形態	規模 (m)			備考	図版
			長さ	幅	深さ		
1号	西側	楕円形	3.4	0.5	0.15	3溝と重複。	1-8
2号	東側	楕円形	4.0	1.1	0.35		1-9
3号	北西部隅	西側	2.85	0.7	0.18	1溝と重複。	1-8

第6表 溝状遺構一覧

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	図版
			器高	口径	底径					
2溝-1	土師質土器	カワラケ	3.0	(11.8)	(5.8)	粗、石英、金色雲母、赤色粒子	赤褐色	やや良	底部回転糸切り痕。	2-6
2溝-2	土師質土器	カワラケ			(5.0)	粗、石英、赤色粒子	橙褐色	やや良	底部回転糸切り痕。	2-6
2溝-3	灰釉陶器	皿		(11.6)		粗、黒色粒子	灰白色	良	丸皿、大塞2期。	2-6
2溝-4	土師器	鉢		(15.4)		密、石英、赤色粒子	橙褐色	良		2-6
3溝-1	土師質土器	カワラケ				やや密、石英、金色雲母、赤色粒子	明橙褐色	良		2-6
3溝-2	土師質土器	カワラケ			(6.0)	やや密、石英、赤色粒子	明橙褐色	良	底部回転糸切り痕。	2-6

第7表 溝状遺構出土遺物観察表

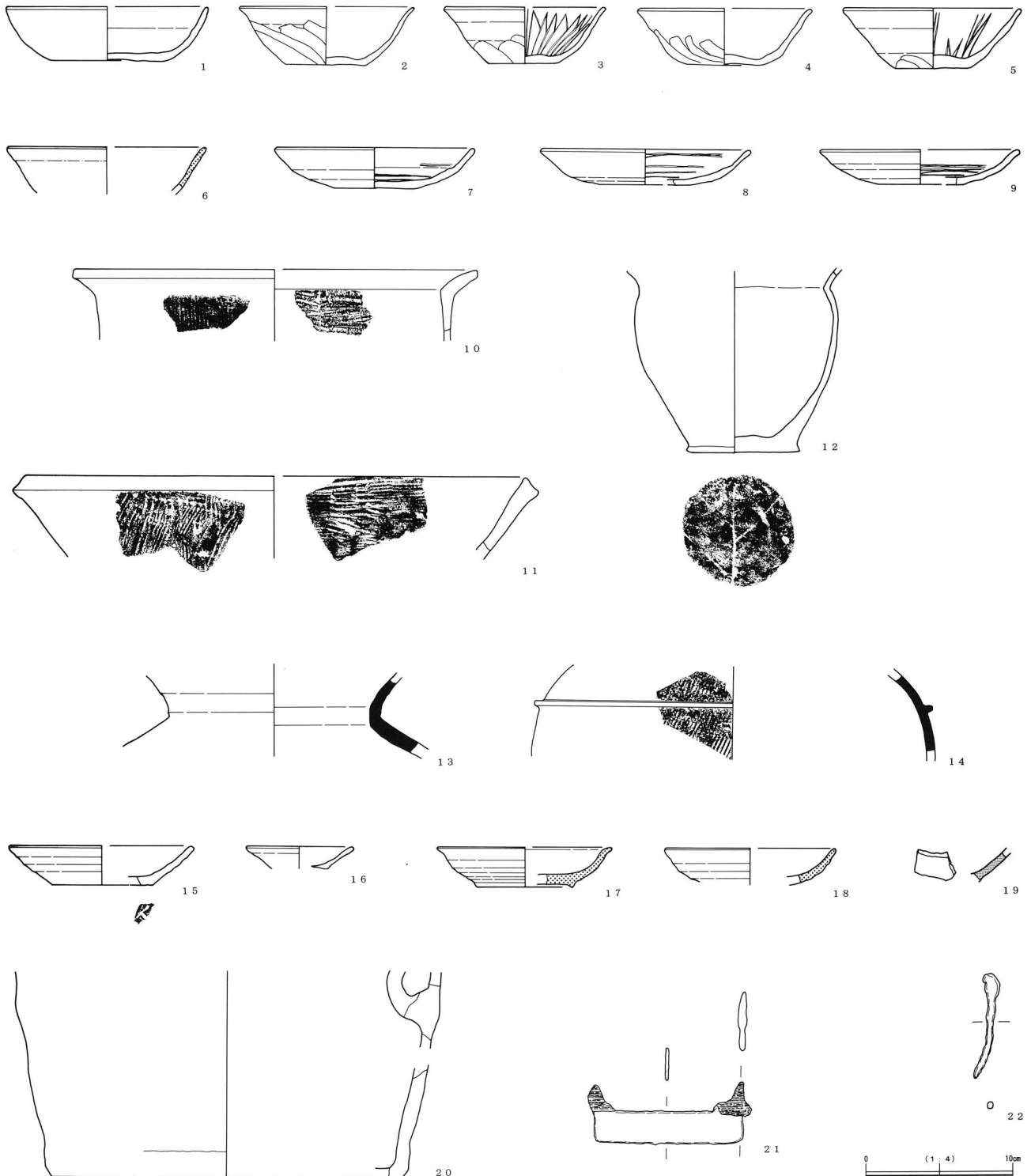
第3章 遺構外出土遺物

遺構外からは今回紹介するもの以外にも、数多くの縄文時代前・中期の土器が出土している。

1～14は平安時代に属するもので、土師器杯、皿、灰釉陶器の碗、甕、鉢、須恵器の甕、凸帯壺などが出土している。今回出土したものは、全体的にみて平安時代前半(9世紀代)のものが主体であった。

15～20は、中世に属する土師質皿(カワラケ)、瀬戸美濃の灰釉陶器類、青磁、内耳土器などである。

灰釉陶器 17・18は、大窯期に相当し、青磁 19は、15世紀前半に相当するとみられる。



第10図 遺構外出土遺物

No.	器種	器形	大 き さ (cm)			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	図版
			器高	口径	底径					
1	土師器	坏	3.6	(13.5)	7.5	密、石英、金色雲母、赤色粒子	橙褐色	良		2-7
2	土師器	坏	3.8	(11.2)	5.0	密、石英、金色雲母、赤色粒子	赤褐色	良		2-7
3	土師器	坏	4.8	(10.6)	4.6	密、石英、金色雲母、赤色粒子	橙褐色	良	内面放射状暗文。	2-7
4	土師器	坏	3.9	(11.5)	(5.3)	密、石英、金色雲母、赤色粒子	暗橙褐色	良		2-7
5	土師器	坏	4.1	11.8	5.0	やや粗、石英、金色雲母、赤色粒子	橙褐色	良	内面放射状暗文。	2-7
6	灰釉陶器	碗		(13.0)		粗、黒色粒子	灰褐色土	良		2-7
7	土師器	皿	2.8	(12.8)	(5.3)	やや密、石英、金色雲母、赤色粒子	暗橙褐色	良	渦巻状暗文。	2-7
8	土師器	皿	2.3	(13.0)	(5.4)	やや密、石英、金色雲母、赤色粒子	暗橙褐色	良	渦巻状暗文。	2-7
9	土師器	皿	2.4	(13.8)	(6.0)	やや密、石英、金色雲母、赤色粒子	黒橙褐色	良	渦巻状暗文。	2-7
10	土師器	甕		(16.6)		粗、石英、金色雲母	暗橙褐色	やや良		2-7
11	土師器	鉢		(32.2)		粗、石英、金色雲母	赤茶褐色	良		2-7
12	土師器	甕			7.5	粗、石英、金色雲母	暗赤茶褐色	やや良		2-7
13	須恵器	甕				粗、白色粒子	黒灰色	良		2-7
14	須恵器	凸帯壺				粗、白色粒子	灰色	良		2-7
15	土師質土器	カワラケ	3.7	(12.0)	(6.8)	やや密、石英	灰白色	やや良	底部回転糸切り痕。	2-8
16	土師質土器	カワラケ		(7.0)		やや密、石英、金色雲母、赤色粒子	暗黄橙褐色	やや良	底部回転糸切り痕。	2-8
17	灰釉陶器	皿	2.7	(11.8)	(6.5)	粗、白色粒子	灰白色	良	端反皿、大窯1期。	2-8
18	灰釉陶器	皿		(11.2)		粗、白色粒子	灰白色	良	丸皿、大窯2期。	2-8
19	磁器	青磁碗				やや密、黒色粒子	灰色	良	15世紀前半。	2-8
20	土師器	内耳土器			(23.2)	粗、白・赤色粒子	黒茶色	やや良		2-8

No.	種別	大 き さ (cm)			特 徴	図版	
		最大長	最大幅	最大厚			
21	鉄製品	牽引金具?	10.0	2.15	0.3		2-8
22	鉄製品	釘?	7.1	0.5	0.4		2-8

第8表 遺構外出土遺物観察表

第4章 ま と め

調査の結果、縄文時代前・中期の土器類のほか、奈良・平安時代、そして中世の土器、須恵器、陶磁器類などが出土し、遺構では平安時代(9世紀代)と中世(15~16世紀代)の遺構が発見された。

平安時代：2・3号住居跡の2軒が発見された。2号住居跡は主に甕1、鉢2が出土しており、住居跡の時期は9世紀初頭とみられる。出土した鉢2は口縁部が受け口状に屈折し、調整は見込み部と内面体部にわたって放射状暗文を有し、外面体部下半に削りが加えられミガキが施されている。底部も糸切り後、ミガキの調整が加えられた痕跡が窺える。このタイプの鉢は、甲府市大坪遺跡などで出土があり、地域的に偏在するものかは明らかでないが県内でも類例として少ないようである。なお、この類の鉢は、大坪遺跡の編年(櫛原2002)で鉢B類として器種分類され、8世紀第4四半期頃~9世紀第1四半期頃に設定されている。

中世：1号竪穴状遺構や1・3・7・8号土坑、2・3号溝状遺構などが確認された。また、遺構外からは土師質皿(カワラケ)や挿鉢、内耳土器、瀬戸美濃産の灰釉陶器(端反皿-大窯1期・丸皿-大窯2期)、青磁(15世紀前半)などが出土した。今回、遺構内外から出土した遺物に手捏ねの土師質皿などがなくことや陶器類の時期から発見された中世遺構は15~16世紀代でまとまっていると考えられる。

出土した土師質皿の胎土に注目すると、精製された緻密なもの(a)、粗いもの(b)の大きく2種類に分けられる。そして、概して口縁部形態と胎土には、相関関係があるようで口縁部と体部の厚さに差がほとんど無く胎土が精製された緻密なもの(1aタイプ)と、器厚が1aタイプのものに比べ厚手となり中には明らかに口縁部が肥厚し胎土が粗くなるもの(2bタイプ)の2種類の土師質皿が基本的に出土している。

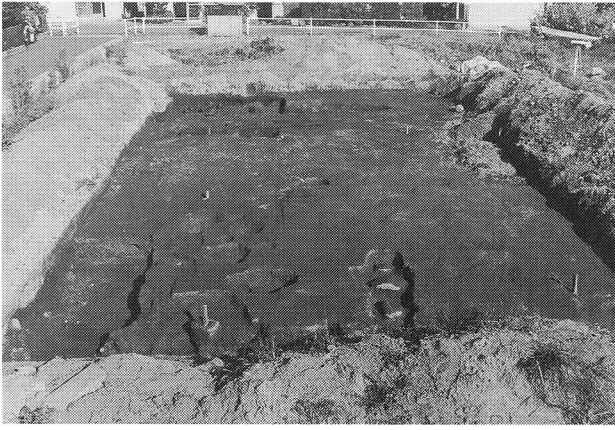
遺構出土の遺物を見ると、1号竪穴状遺構の土師質皿(カワラケ)はすべて1aタイプのものでまとまっているが、重複する7号土坑には2bタイプのもの(7土-3~5)が含まれる。また、2号溝状遺構は破片であったが2bタイプの土師質皿(2溝-1・2)と瀬戸美濃産丸皿(大窯2期)が共伴していた。

このような土師質皿の特徴や遺構出土遺物の内容、先学の研究成果(降矢ほか2001)などから勘案すると、今回の中世遺跡は15世紀後半~16世紀中葉頃に相当すると思われる。おそらくは、さらに2時期に細分が可能と思われ、器厚が厚手で胎土の粗い2bタイプの土師質皿は16世紀前半~中葉に相当してくるものと考えられる。今後、新たな調査成果を待つて詳細な検討を試みたい。

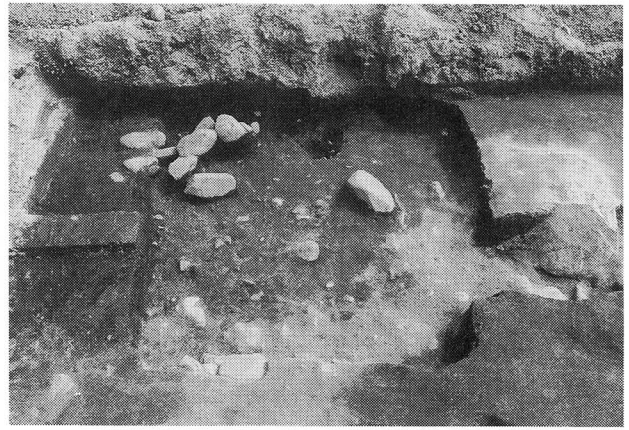
引用・参考文献

- 佐野 隆 2000「深山田遺跡」山梨県明野村教育委員会・峡北土地改良事務所
降矢哲男ほか 2001「山梨県における中世の土器様相について」中世土器研究会編『中世土器研究論集』中世土器研究会
櫛原功一ほか 2002「大坪遺跡」社会福祉法人清翔会・大坪遺跡発掘調査会

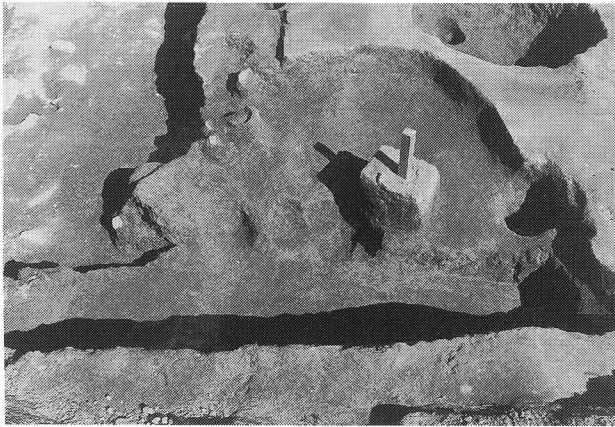
図版 1



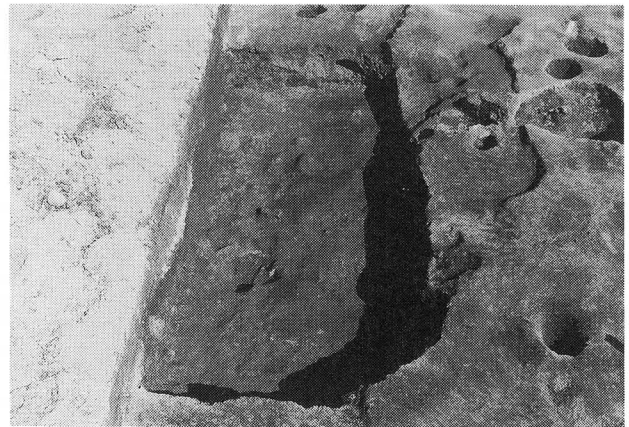
1. 調査区全景



2. 2号住居跡



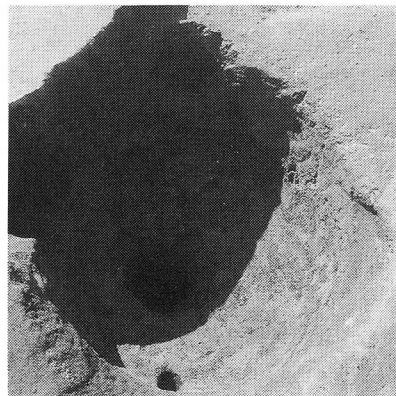
3. 3号住居跡



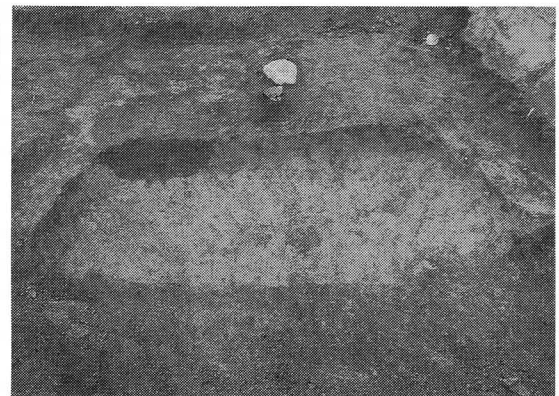
4. 1号竖穴状遺構



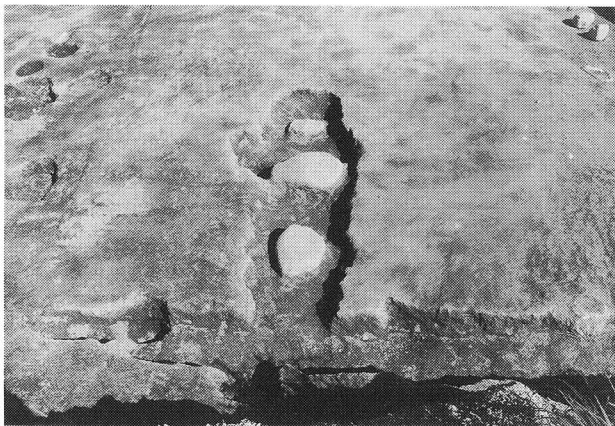
5. 2号土坑



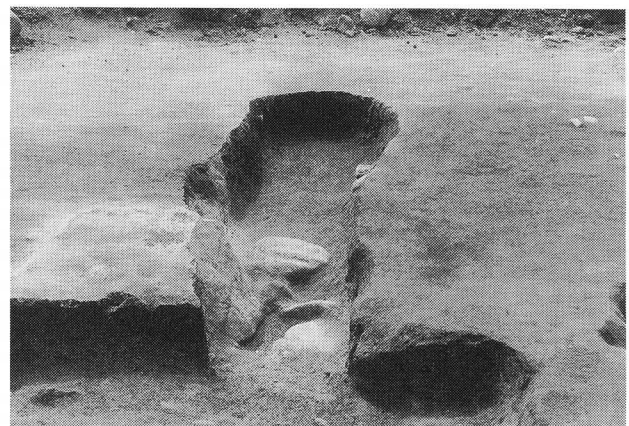
6. 3号土坑



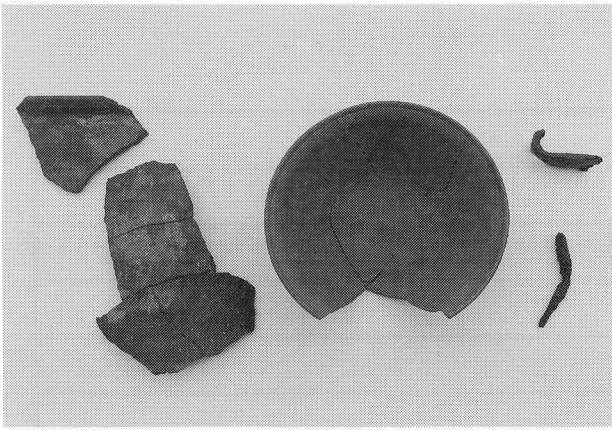
7. 7号土坑



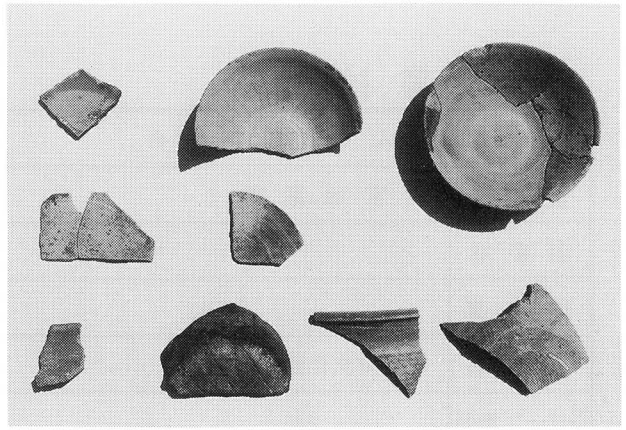
8. 1・3号溝



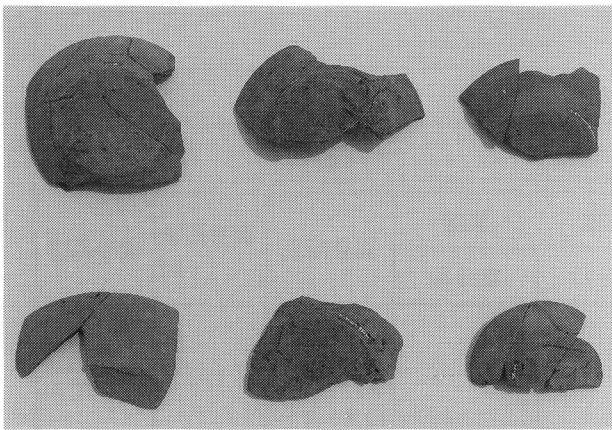
9. 2号溝



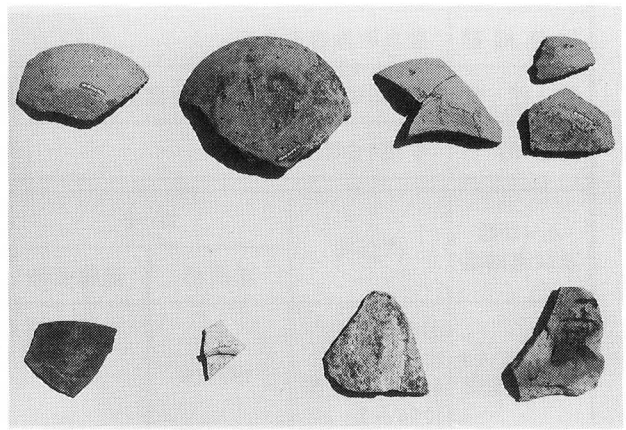
1. 2号住居跡出土遺物



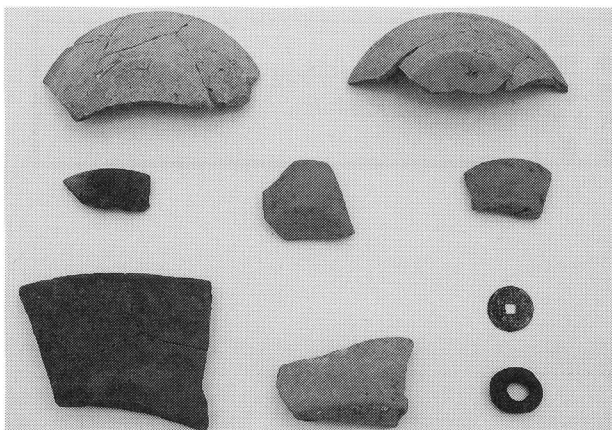
2. 3号住居跡出土遺物



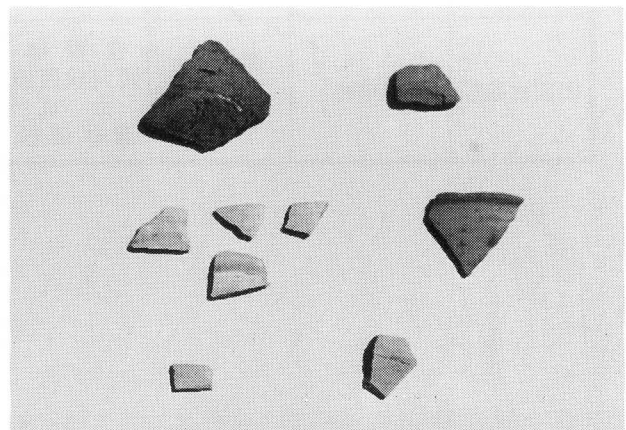
3. 1号竖穴状遺構出土遺物



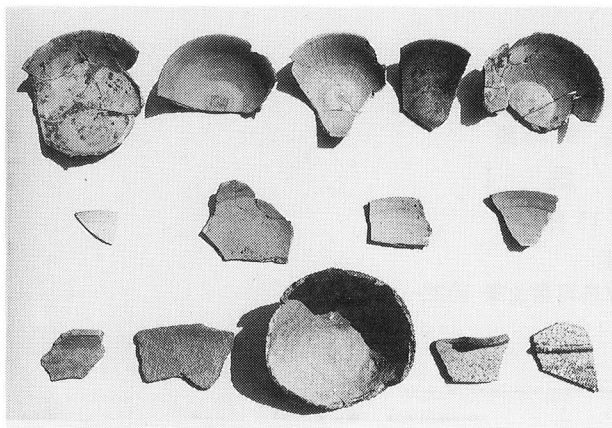
4. 土坑出土遺物



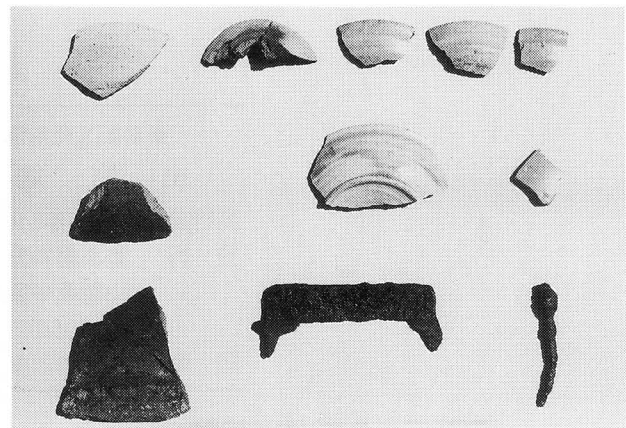
5. 7号土坑出土遺物



6. 2・3号溝状遺構出土遺物



7. 遺構外出土遺物



8. 遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	さんぐうぢいせき							
書名	山宮地遺跡 I							
副書名								
巻次								
シリーズ名	敷島町文化財調査報告書							
シリーズ番号	23							
編著者名	大島正之・小坂隆司							
編集機関	敷島町教育委員会							
所在地	〒400-0123 山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020							
発行年月日	平成16年6月15日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
さんぐうぢいせき 山宮地遺跡	山梨県 中巨摩郡 敷島町島上条 1256-7	193928	37			平成11年 9月17日～ 平成11年 10月1日	150	大型店舗 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
山宮地遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代 中世	住居跡 竪穴状遺構 土坑 溝状遺構	縄文土器 土師器 須恵器 土師質土器 陶磁器	土師質土器(カワラケ)を伴う中世の竪穴状遺構と土坑が発見された。			

敷島町文化財調査報告 第23集

山宮地遺跡 I

発行日 2004年(H16)6月15日

発行 敷島町教育委員会

山梨県中巨摩郡敷島町島上条 1020

TEL(055)277-4111

印刷 (有)協和印刷社

